

京都大学名誉教授の佐伯啓思さんと話をしている。ある番組の話題になった。6月2日に放映されたNHKスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」。難病を患った女性が、海外の希望者を受け入れているスイスで安楽死を選ぶ。先月の朝日新聞にも寄稿していたが、佐伯さんはかなり感じるところがあったようである。

佐伯啓思さんの論考

最近、佐伯さんは著書などで死について書いている。昨年の著書「死と生」では冷徹な現実認識を示した。

「死とは、生が徐々に衰退し、変形し、われわれの存在の在り方を定めてゆくプロセスである。」

河村直哉

日曜に書く

論説委員

あり、その極限に現れるもの」だ。

その通りだ。通常、私たちは老い、あるいは病み、活動力や体の自由を失って行く。多くの場合、医療機関なり家族なり、自分ではない者の力を借りつつ最期を迎える。

安楽死とも向き合う時代

面でも治療を続けるかといった判断も自分でできなくなる。そのようなことを佐伯さんは同書で指摘している。

だが安楽死となると話は少し違ってくる。それもやはり医師の手を借りるなど、自分だけで完結する死ではない。しかし自分の意志で最期を迎えるという点では自己決定の死といえる。

「いつやって生きるか」

筆者は後になって番組を見た。姿勢をたじた。活動的な女性が体の機能を奪われる神経の難病となり、いずり、自分ではない者の力を借りて人工呼吸器が必要になるといわれる。自殺を試みたが体に力が入らず未遂に終わった。病気のせいだろうか、たどたどしい口

うちに急いでのことだった。

番組中、スイスで対応した医師の言葉に注意を引かれた。女性がスイスに住んでいて長距離移動しなくていいなら、こんな早く死を選ばなくてよかった、と医師は話した。スイスで安楽死を選ぶ日本人は増えていくという。

番組は、同じ病気になる家族の思いに支えられて生きることを選んだ女性も描いている。

家族の思いに支えられて生きることを選んだ女性も描いている。それを選んだ人の意志も支える家族の思いも、とても貴重なものだ。当然、尊重されるべき判断である。

生じる。この点でも議論が必要である。

佐伯さんは西部さんと親交が深かった。西部さんが自殺した直後の朝日新聞「異論のススメー」で、その死は私たちに大きな問いかけを発した、と書いている。「それは、高度の医療技術や延命治療が発達したこの社会で、人はいかに死ねばよいのか、という問題である」

西部さんの自殺

思い出すのは、昨年1月、入水自殺した評論家の西部さん。このことである。西部さんは他者に迷惑をかけるなら自殺することを公言していた。実際に体が不自由になり、自ら人生の幕を引いた。

この件では、体の不自由な西部さんを手助けした人が自殺幇助で有罪となった。安楽死制度がない日本ではこういう問題が生じる。この点でも議論が必要である。

オピニオン